主婦の社会的支援ネットワーク特性と精神的健康調査の基礎分析（その２）

野　邊　政　雄・田　中　宏　二

目　　次

1　本報告書の目的
2　調査地と調査対象者
3　調査方法
4　単純集計表
（以上前号）
5　主要な知見
（以上本号）

5　主要な知見

以上の単純集計表から読み取ることのできる，筆者らにとって興味深い知見を５点挙げておく。

第１に，回答者の岡山市への流入過程を検討する。調査結果によると，34.4％の回答者は岡山市で出生し（問１），44.7％は10代をその都市でおくった（問５）。そして，62.3％の回答者の前住地は岡山市であった(問６)。さらに，出生地，10代を過ごした場所，前住地が岡山市以外であっても，大部分は岡山県内であった。これから，岡山市といった地方都市の住民はその都市出身者が多く，その都市への流入者も日本全国から集まってきたのでなく，その都市の後背地（近距離圏）から主に流入したといえる。

第２に，町内会，婦人会，老人会などの地域集団への参加を吟味する。まず，日本の都市の特徴として，町内会（あるいは，自治会，部落会，組合などと呼ばれる地域集団）へ加入する世帯の割合が高く，そうした半強制的ないし自動的な地域集団への参加が集団参加の中心をなしていることが指摘されてきた(鈴木　1976)。例えば，鈴木広らの調査によれば，東京では62.6％が町内会に加入しており，福岡市では53.5％がそれに加入していた（安河内　1994，p.100)。この特徴は，岡山市の既婚女性を対象に行った本調査では顕著であった。この調査の回答者の94.2％が積極的であれ，消極的であれ町内会に加入していた（問８)。つまり，岡山市では，町内会は親族世帯（単身世帯でない世帯）のほとんどを網羅しているのである。次に，町内会が多くの機能を果たし，その機能が包括的であると言われている(中村　1964)。岡山市の調査では，町内会，婦人会，老人会といった地域集団が主催する各種の活動への参加を尋ねた（問12)。参加率の高い活動は，清掃（53.3％)，募金の協力（50.8％)，盆踊り・祭り（44.2％)，運動・レクリエーション・旅行（36.4％)，慶弔の世話（29.9％)，総会に出席（26.1％)，空き缶・空き瓶回収（21.4％)，空き缶拾い（18.8％）であった。このことから，町内会をはじめとする地域集団が多機能的であると共に，かなりの住民がそうした各種の活動に参加していることが判る。

多くの回答者が地域社会に根を張っていることは，意識や態度に関する質問の結果からも検証できる。近所から害虫の駆除やドブの清掃など，労力奉仕のような形で協力を求められた場合，97.8％の回答者はすすんでないし求められれば協力すると答えていた。そし

て，そうしたことを行政サービスや商業サービスに任せてしまえばよいという回答者は，ほんの少数であった(問11)。さらに，4つの意識類型に住民を分類する奥田が案出した質問に対し，60%以上の回答者が地域社会の「和」を大切にする「地域共同体モデル」を選択していた（問18)。これから，多くの回答者は近隣住民と協力・共同し，近隣社会の秩序を守ってゆく地域生活に共鳴していることが判る。

以上の結果を要約すれば，岡山市の既婚女性は，半強制的ないし自動的な町内会に加入し，その広範な活動に参加し，地域社会の住民との共同・協力にも積極的であるということになる。さて，日本の農村では村民は生産と生活で共同・協力しあうので，各人・各戸が互いに親密な社会関係を取り結んでいる。岡山市の女性は地域社会に根を張って生活しており，都市において農村に見られるような親密な社会関係を形成しているといえる（都市における「ムラ状況」)。

第3に，町内会以外の集団への参加を検討する。加入率の高い集団は，生協（45.0%)，P.T.A.(31.9%)，趣味の会・スポーツ団体(27.4%)，婦人会(21.6%)，子供会(19.6%)であった（問13)。半強制的ないし自動的な地域集団である婦人会や，学童がいれば半強制的ないし自動的に加入する傾向の強いP.T.A.や子供会が挙げられているものの，任意加入性が強く，自らの興味・関心・利害を実現するための集団である生協や趣味の会・スポーツ団体にもかなり高い割合の回答者が加入していることは注目に値する。また，趣味の会・スポーツ団体での活動が比較的盛んであることは，公民館やカルチャー・センターでの活動に過去1年以内に参加した回答者が32.2%にのぼることによっても裏付けることができる。このような集団加入の実態は，つぎのように要約できよう。岡山市の既婚女性のほどんどは町内会を筆頭とする半強制的ないし自動的な地域集団に加入していたから，そうした集団への参加が集団参加の中心をなしているといえる。同時に，自己実現のために任意に加入する趣味の会・スポーツ団体への加入率が比較的高いことは，従来の地域社会の「ムラ状況」を打破する手段参加パターンとして着目すべきであろう。それと，生協への加入率が45.0%と著しく高率であることが，岡山市の特徴として指摘できる。

第4に，コミュニティ・クェスチョンの視点から，回答者の社会的ネットワークを検討する。現代都市社会において，大規模な分業化が社会関係の構成や内容にいかなる影響を及ぼすかに，社会学者はこれまで関心を払ってきた。ウェルマン (Wellman 1979) は，現代都市社会における社会的ネットワークの形態に関する，これまでに提出された議論を「コミュニティ崩壊論」(Community Lost)，「コミュニティ存続論」(Community Saved)，「コミュニティ解放論」(Community Liberated) の3つの見解に統合・要約し，コミュニティ・クェスチョンと名付けたことは，本稿の冒頭で述べた。

それぞれの見解を要約すると，次のようである。かつては，地域社会において親族や近隣者が強固に結束していた。しかし，コミュニティ崩壊論の提唱者の見解によれば，第2次社会関係（官僚制的機能集団）が発達したために，地域社会の結束は甚だしく粉砕され，人々は社会的に孤立してしまったという。次に，コミュニティ存続論は，現代の都市社会において，人々は親族や近隣者と強固な社会関係を依然取り結んでおり，親族や近隣者は社交や援助において重要な役割を果たしているという見解である。もう1つの見解であるコミュニティ解放論によれば，現代の都市社会において，親族関係や近隣関係は脆弱化してしまったけれど，代わりに，友人関係が地域社会を越えたさまざまな場所に網の目状に分散して組織され，本人が住む都市内で張り巡らされているだけでなく，全国各地にまで延びているという。

ここでは，回答者の社会的ネットワークが，これら3つの見解のいずれに適合するかを検討したい。問28から問35によって，1人の回答者は平均6.020人と同居する家族以外に社

会関係を取り結んでいることが明らかになった。それらの質問文の後に示した〔間柄×居住地〕の表より，相手の間柄別の平均人数を多いものから少ないものへ並べると，(1)友人，(2)親族，(3)近隣者，(4)職場仲間（同僚・上司）の順である。そして，１人の回答者には平均して，友人が2.286人，親族が2.198人，近隣者が0.950人，職場仲間が0.585人いた。友人と親族の人数はほとんど差はなく，友人や親族の人数の多さが際立っている。また，社会関係を取り結ぶ相手の居住地別の人数を同じように多いものから少ないものへ並べると，(1)岡山市内，(2)地域社会(本稿では，歩いて15分以内の地域をこのように呼んでおく)，(3)（岡山市内を除いた）岡山県内，(4)岡山県外である。そして，１人の回答者は平均して，岡山市内には2.784人，地域社会には1.769人，岡山県内には0.751人，岡山県外には0.716人の人々と社会関係を組織していた。これらの数値を検討すると，岡山県内で組織されている社会関係数と岡山県外にまで延びている社会関係数は相対的に少なく，ほとんどの社会関係は，岡山市内（家族外の社会関係の総数の46.2%）か地域社会で組織されている（家族外の社会関係の総数の29.4%）ことが判る。そして，地域社会でも少なからぬ1.769人の社会関係が組織されているから（家族外の社会関係の総数の29.4%），地域社会の社会的連帯が完全に崩壊したとはいえない。このことは，上述した半強制的ないし自動的な地域集団への加入率の高さやそうした集団が主催する各種の活動への参加率の高さによっても傍証できる。以上の考察をまとめると，次のようになる。回答者の社会的ネットワークは，親族の人数が多く，地域社会内で少なからぬ社会関係が組織されている点では，コミュニティ存続論に合致する。だが，友人の人数が最も多く，地域社会の外で過半数の社会関係が取り結ばれていることから，総体的には，それはコミュニティ解放論に最も適合すると判定できる。

第５には，既婚女性の生活ストレッサー，生活満足感，精神的健康度など生活適応についてである。生活ストレッサーは，家族の病気や死，失業など家庭の内外における大きな生活出来事（life events）の有無と認知的重大さを得点化したものである。生活ストレッサー得点のレンジは，0-60点であるが，全標本の平均4.42（ＳＤ＝4.52）であり，全般的に生活ストレス度は低い。生起率の比較的高い出来事は，家族の病気･けが（32.4%），家族･近親の死（35.9%），大きな出費（20.6%）である。とくに，家族の病気や死は重大さが大きかった。

精神的健康度は，平均点でみるとうつ状態得点が最も低く(1.66)，社会的活動障害得点が最も高い（9.93），身体的症状得点（6.79）と不安･不眠得点（5.70）はその中間であった。下位尺度得点の相対的比較について，東京都老人総合研究所（1992）の中・高年住民を対象にしたＣＨＱ下位尺度得点と比較してみると，うつ状態が最も低い得点を示すのは共通しているが，他の下位尺度間には大差がなく，本報告のように社会的活動障害が高いのは特徴的のようである。

〔謝辞〕

調査票作成のために実施したプリ･テストでは，津島東の北公民館を利用する女性の方々に有益な助言をいただき，調査票の質問を改善することができた。また，岡山市の398名にのぼる女性が貴重な時間を割いてこの調査に快く応じてくれた。これらのお世話になった方々に感謝します。

次に，調査員の監督と調査のための事務を行なったのは，平成５年度の社会学研究室の大学院学生と社会心理学研究室の学部３年生であった。そして，回答者の家を訪問し，面接調査を行ってくれたのは，田中が担当する「社会心理学概論」の受講学生であった。これらの学生の努力に感謝したい。

最後に，この調査は，文部省科学研究費補助金総合研究(A)「人間の健康防御機構に及ぼす対人援助機能に関する総合研究」(研究代表者 田中宏二 課題番号05301014)の研究助成金によって実施された。本稿は，その研究成果の一部である。

〔補論〕

ここでは，調査票の質問をどのような理論的根拠で構成したかと，調査地区の詳細を書き残しておきたい。

第1に，社会的ネットワークを測定するの質問（問28から問35）は，次のような考察から構成した。過去の標本調査では，個人が取り結ぶ社会的ネットワークは，次の2つの質問方法のいずれかによって，測定されてきた。

第1の質問方法では，まず，最大限の人数を指定して，回答者が親密と感じている人々の名前を挙げてもらう。例えば，ウェルマン（Wellman 1979）は，「あなたがとても親密と感じている人々の名前を6人まで挙げて下さい」という質問を用いた。この後に，挙げられた相手との間柄や交際頻度，相手の居住場所，相手からどのようなサポートを得ることができるかなど，相手に関する詳細な情報を尋ねてゆく。この方法を採用した研究としては，Laumann（1973），Wellman（1979），直井・尾嶋（1988），前田（1993）などがある。

第2の質問方法では，まず，いくつかの困難な状況を設定し，そうした状況でサポートを得ることができる人々の名前を挙げてもらう。ソーシャル・サポートは，広義には，財やサービスの援助のみならず，親交をも意味しうる（嶋 1991）。第2の質問方法とは，広義のサポートを提供する相手の名前を回答者に挙げてもらうことによって，回答者が組織する社会的ネットワークを確定しようとする方法であるといえる。具体的には，「家を留守にするとき，植物に水をやるとか，郵便物を郵便ポストから取っておくといったことを誰に頼めますか」(Fischer 1982, p.36）といった質問をいくつかするのである。この後に，挙げられた相手との間柄や交際頻度，相手の居住場所など相手に関する詳細な情報を尋ねてゆく。この方法を採用した研究としては，Fischer (1982)，Kendig (1986)，野邊(1992)などがある。

それぞれの方法には，一長一短がある。第1の質問方法の利点は，社会的ネットワークと社会的支援ネットワークとを区別できることである。個人は自らが取り結ぶ社会関係を動員して，サポートを獲得しうる。だが，サポートを希求しても，個人の取り結ぶ社会関係の一部のみがそれに役立つにすぎない（Wellman 1979, 1981, pp.172-81; Hall and Wellman 1982, pp.1-2)。第1の質問方法では，知覚された親密度を使って社会的ネットワークを定義し，このうちからサポートを得ることができる社会関係を尋ねるから，社会的ネットワーク（＝ある個人が取り結ぶ社会関係の総体）と社会的支援ネットワーク（＝ある個人が属する社会的ネットワークの広がりの中で，特に支援的な関係だけで構成される下位ネットワークをいう）とを峻別できる。そして，個人が取り結ぶ社会的ネットワークのうちのどの社会関係から，どのようなサポートを得るかを明示できる。これに対し，第2の質問方法では，広義のサポートによって個人が取り結ぶ社会的ネットワークを確定しているから，社会的ネットワークと社会的支援ネットワークとを区別できない。(ただし，問28から問35の質問で測定できるのは，社会的支援ネットワークであると解釈することもできる。この場合は，測定はできないけれど，社会的支援ネットワークを包含するように社会的ネットワークが存在すると想定するのである。)

もう1つの第1の質問方法の利点は，回答者が親密と感じている相手の名前を挙げるだ

けなので，質問が簡潔になることである。だから，自己記入式の調査票でもその質問を用いることができる。これに対し，第２の質問方法は，いくつかの困難な状況を設定し，それぞれの状況でサポートを仰げる相手の名前を挙げてもらうから，質問が非常に複雑になる。従って，面接調査でなければ，その質問を用いることができない。

第２の質問方法の利点は，回答者が社会関係を取り結ぶ相手を想起することが容易であり，より正確なデータを得ることができることである。第１の質問方法で用いられる親密という言葉は曖昧であり，ある回答者は財やサービスを援助してくれるから相手を親密と認知するかもしれないが，別の回答者はレジャーを一緒にするから相手を親密と認知するかもしれない。親密な相手の名前を挙げるように頼まれるよりも，いくつかの具体的な困難な状況を設定し，それぞれの状況でサポートを提供してくれる相手の名前を挙げるように質問されるほうが，回答者はより正確に相手を特定し，名前を挙げやすい（Jones and Fischer 1978, pp.1-10）。

このことと関連するが，親密と感じる人々という表現が曖昧であるから，第１の質問方法で回答者に親密な相手の名前を無制限に挙げてもらうと相手の人数が膨大になることもありうる。だから，第１の質問方法では，挙げてもらう親密な相手の人数を制限せざるをえず，個人が取り結ぶ社会的ネットワークの規模を正確に確定することが難しい。

岡山市の調査では，第２の質問方法を採用することにした。これは，その調査は面接調査でおこなうことと，第２の質問方法のほうがより正確に社会的ネットワークのデータを入手できるという２つの理由からである。だが，この質問方法を用いるに当たって，２つの問題点に遭遇した。

第１の問題は，過去に相手から得た実際のサポートを尋ねるのか，あるいは相手から得ることができるサポートをたずねるかということである。つまり，サポートを得たという「過去の事実」を尋ねるか，その「利用可能性」を尋ねるのかということである。「過去の事実」で尋ねると，最近，困難な状況に直面した回答者はそうでない回答者よりもより多くの社会関係を挙げることになる。従って，過去の事実で質問すると，社会的ネットワークは，最近，困難な状況が回答者に発生したかどうかといったことによっても影響を受けてしまう。この難点を回避するために，サポートを得ることが可能な相手の名前を挙げてもらうことにした。ただし，親交というサポートの入手可能性に関する質問(例えば，「喫茶店などで世間話をできる人は誰ですか」といった質問）は曖昧であるので，親交に関しては過去の事実に基づいて相手の名前を挙げてもらうことにした（問35）。

第２の問題点は，サポートが提供されるどのような困難な状況を設定するかによって，社会的ネットワークが影響を受けることである。ある特定の領域に偏った困難な状況を設定すると，社会的ネットワークの一部しか調査によってすくい出すことができない。従って，ほとんどの領域を網羅するような困難な状況を複数設定し，その状況でサポートを得ることができる相手の名前を挙げてもらうことが求められる。このためには，サポートにはどのような次元（種類）があるのかを明らかにし，これに基づいてサポートに関する質問を作成することが要請される。

サポートの次元については，筆者らは，ウェルマンらの研究（Wellman and Wortley 1990）を参照した。彼らは，1977－78年にイーストヨーク（カナダのトロントの中心部から車ないし地下鉄で30分の所にある自治都市borough）において29人の回答者に対しそれぞれの個人が取り結ぶ社会関係についての面接調査を実施した。これは，１人当たりの面接時間が10時間から15時間にわたる，極めて詳細な調査であった。29人への面接から，総計で344の活性化した社会関係を引き出すことができた。そして，それぞれの相手からどのようなサポートを受けたかを尋ね，それを18種類のサポートにまとめた。さらに，それを

因子分析し，次の5つの主要なサポートの因子（サポートの次元）を抽出した。つまり，(1)情緒的サポート　emotional aid, (2)負担の小さいサービス samall services, (3)負担の大きいサービス　large services, (4)金銭的サポート　financial aid, (5)親交　companionshipである。ソーシャル・サポートに関してこれら5つの次元があるから，それぞれの次元に対応する質問を構成することでサポートのすべての領域をほぼ網羅できると考えた。

これらのサポートのうち，社会関係を取り結ぶ相手の多くが回答者に提供したサポートは，情緒的サポート（ネットワーク構成員の62%が提供）と負担の小さいサービス（ネットワーク構成員の61%が提供）であった。ウェルマンらの分析では，前者は(1)些細な情緒的サポート，(2)家族問題についての助言，(3)重大な情緒的サポートと分かれ，後者は(1)些細なサービス，(2)家庭用品の貸借，(3)些細な家事サービスなどに分かれた。そこで，情緒的サポートと負担の小さいサービスの次元については，細分されたサポートを参照しつつ，それぞれ2つずつの質問を設定し，その他のサポート次元については，それぞれ1つずつの質問を設定することにした。これらの質問によるプリ・テストで，回答者は職場仲間の名前を多く挙げなかった。職場仲間との社会関係を調査ですくい出すために，「仕事についての話や相談を誰とするか」という質問を追加した。このサポートは，先のサポートの5つの次元でいえば，情緒的サポートと親交の2つの次元に関わる。こうして作成されたのが，ソーシャル・サポートに関する問28から問35の質問である。これらの質問と5つのサポートの次元との対応は次のようになる。

（A）回答者が入院した場合の家族の世話（問28）
　　(3)負担の大きいサービスの次元
（B）2～3万円の借金（問29）
　　(4)金銭的サポートの次元
（C）仕事上の話や相談（問30）
　　(1)情緒的サポートと(5)親交の両方の次元
（D）心配事の相談（問31）
　　(1)情緒的サポートの次元のうち些細な情緒的サポート
（E）失望や落胆をしているときの慰め（問32）
　　(1)情緒的サポートの次元のうち重大な情緒的サポート
（F）留守のときの家の世話（問33）
　　(2)負担の小さいサービスの次元
（G）些細な物やサービスの入手（問34）
　　(2)負担の小さいサービスの次元
（H）交遊（問35）
　　(5)親交の次元

第2に，社会関係の親密度は次のように構成した(問36)。サポートを得ることのできる人びとのそれぞれに対する親密度は，3段階尺度で測定をした。ただし，この測定法は，Antonucci and Akiyama (1987) の社会的支援ネットワーク構造にもとづくものである。回答者に4層円からなるダイヤグラムを提示し，一番内側の中心円には「あなた」と書かれ，その外側の3つのいずれかの円に，問28－問35であげられた人物を位置づけるように求める。最も内側の円には，「その人のいない人生なんて考えられないほど親しく，非常に大切な人」を入れる。中間の円には「かなり親しく，大切な人」を，最も外側の円には「ふつう程度に親しく，大切な人」を入れるよう求める。データの整理法としては，支援者の

円内の位置づけ（カテゴリー）と尺度値（1-3）の２通りで行う。このようなネットワーク構造の捉え方により，個人の人生における社会的支援者の加齢的変化が捉えられるとしている（Antonucci and Akiyama 1987, Kahn and Antonucci 1980)。

第３は，その他の心理尺度の構成についてである。

生活ストレッサー尺度（問21）は，過去半年間の大きな生活出来事（life events）の有無とその重大さを５段階尺度（0-4）で測定する。生活出来事の構成は，宗像ら（1986）の37項目の生活出来事を参考にし，既婚女性に適当と思われる出来事15項目を設定した。高得点ほど高ストレスを示す。

パーソナリティ尺度（問22）は，Holahan and Moos（1985）を参照し，ストレスへの耐性的な性質を示すパーソナリティ特性として，自信性(self-confidence)次元６項目および楽天性（easygoing）次元３項目の形容詞句を各５段階尺度（1-5）で測定する。高得点ほどその性質が強いことを示す。自信性に関して，主因子解による因子分析を行い，その一因子性を確認した(第１因子の分散の説明率45.7%)。また，尺度項目全体の信頼性も確認できた（クロンバックのα係数.751)。楽天性に関しては，３項目間の相関を求めたが，そのうち項目番号８（落ち着きがある）は他の２項目との相関値は著しく低く（項目７とは.137，項目９とは.130)，また信頼性係数も低いので除去する必要があった(項目８を除去後の２項目の信頼性係数α＝.688)。

精神的健康尺度（問23）は，日本版ＧＨＱ精神健康調査票（中川・大坊 1985）を用いた。精神的健康の指標としてよく使用される質問紙の一つである。本報告では，４下位尺度各７項目計28項目の短縮版を用いた。採点法に関しては，リッカート法による４段階尺度（0-3）とＧＨＱ法による２段階尺度（0-0-1-1）があるが　前者によって採点した。下位尺度別合計点と４下位尺度合計の総合得点を用いる。ＧＨＱ得点が高いほど精神的に不健康であることを示す。

生活充実感（問24）は，青木・松井・岩男（1986）を参照し，生活全般に対する張りや生きがい感の程度をたずねる５項目からなる。５段階尺度（0-4）で測定し，得点の高いほど充実感があることを示す。生活満足感は100点満点で評定させた。

第４に，調査地区を明示しておきたい。岡山市の中心部にある，昭和29年４月の合併によってできた地域（岡山地区）をこの調査の調査地区としたことは，前述した，その地区を図１に示しておく。平成４年12月現在の岡山市の人口は596,078人(住民基本台帳による）であり，そのうちの65.3%が中心部に住んでいる。

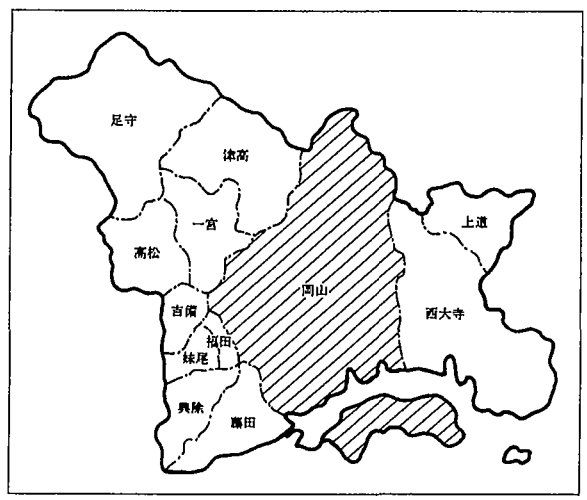

図１　岡山市の地図
（注）中央の斜線部分が、本文でいう岡山地区である。

〔引用文献〕

Antonucci, T.C., and H. Akiyama. 1987. "Social networks in adult life and a preliminary examination of the convoy model." *Journal of Gerontology*, Vol. 42.

青木まり・松井 豊・岩男寿美子・1986. 「母親意識から見た母親の特徴——ライフ・ステージ, 自己評価, 充実感との関係から——」. 『心理学研究』, 第57巻.

Axelrod, Morris. 1956. "Urban structure and social participation." *American Journal of Sociology*. Vol.21. (鈴木広訳. 1965. 「都市構造と集団参加」. 鈴木広 (訳編). 『都市化の社会学』. 誠信書房)

Bell, Wendell, and Gray Boat. 1957. "Urban neighborhood and informal social relations." *American Journal of Sociology*, Vol.63.

Durkheim, Emile. 1893. *De la division du travail social: Étude sur l'organisation des sociétés supérieurs*. (田原音和訳. 1971. 『社会分業論』. 青木書店)

Dotson, Floyd. 1951. "Patterns of voluntary association among urban working-class families." *American Sociological Review*, Vol.16.

Fellin, Phillip, and Eugene Litwak. 1963. "Neighborhood cohesion under conditions of mobility." *American Sociological Review*, Vol.28.

Fischer, Claude S. 1976. *The Urban Experience*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.

Fischer, Claude S. 1982. *To Dwell among Friends*. Chicago: University of Chicago Press.

Gans, Herbert J. 1962a. *The Urban Villagers*. New York: The Free Press.

Gans, Herbert J. 1962b. "Urbanism and suburbanism as ways of life: A re-evaluation of definitions." In M. Rose (Ed.), *Human Behavior and Social Process*. London: Routledge and Kegan Paul.

Granovetter, Mark S. 1973. "The strength of weak ties." *American Journal of Sociology*, Vol. 78.

Greer, Scott. 1956. "Urbanism reconsidered: A comparative study of local areas in a metropolis." *American Sociological Review*, Vol. 21.

Hall, Alan, and Barry Wellman. 1982. *Support and Non-support*. Toronto: University of Toronto.

Holahan, C.J., and R.H. Moos. 1985. "Life stress and health: Personality, coping, and family support in stress resistance." *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 49.

House, J.S.,C. Robbins, and H.L. Metzner. 1982. "The association of social relationships and activities with mortality: Prospective evidence from the Tecumseh Community Health Study." *American Journal of Epidemiology*, Vol. 116.

Jones, L.M. and Cluade S. Fischer. 1978. *Studying Egocentric Networks by Mass Survey*. Berkeley: Institute of Urban and Regional Development, University of California.

Kadushin, Charles. 1966. "The friends and supporters of psychotherapy: On social circles in urban life." *American Sociological Review*, Vol. 31.

Kahn, R.L., and T.C. Antonucci. 1980. "Convoys over the life course: Attachment, roles and social support." In P.B. Baltes and O.G. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior*. New York: Academic Press.

Kendig, Hal L. (Ed.), 1986. *Ageing and Families: A Social Networks Perspective*. Sydney: Allen and Unwin.

Laumann, Edward O. 1973. *Bonds of Pluralism*. New York: Wiley.

Litwak, Eugene. 1961. "Voluntary associations and neighborhood cohesion." *American Sociological Review*, Vol. 26.

Litwak, Eugene. 1965. "Extended kin relations in an industrial democratic society." in Ethel Shanas and Gordon F. Streib (Ed.), *Social Structure and the Family: Generational Relations*. Englewood: Prentice-Hall.

前田信彦．1993．「都市におけるパーソナル。コミュニティの形成――ソーシャル・ネットワーク論からの分析――」．『日本労働研究機構研究紀要』，No. 6.

宗像恒次・中尾唯治・藤田和夫・諏訪茂樹．1986．「都市住民のストレス源と精神健康度」．『精神衛生研究』，32巻.

中川泰彬・大坊郁夫．1985．「日本版ＧＨＱ精神健康調査票手引」．日本文化科学社.

中村八朗．1964．「三鷹市の住民組織――近郊都市化に伴うその変質，近郊都市の変貌過程――」．『三鷹市総合調査報告』，ＩＣＵ社会科学研究所.

直井　優・尾嶋史章（編）．1988．『農村社会の構造と変動――岡山市近郊農村の30年――』.

野邊政雄．1992．「『混住化農村調査』第１次報告書」．『岡山大学教育学部研究集録』，第89号・第90号.

Pierce, G.R., B.R. Sarason, and I.G. Sarason. 1990. "Integrating social support perspectives: Working models, personal relationships, and situational factors." In S. Duck (Ed.), *Personal relationships and social support*. London: Sage.

Shulman, Norman. 1976. "Network analysis: A new additon to an old bag of tricks." *Acta Sociologica*, Vol. 19.

嶋信宏．1991．「大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究」．『社会心理学研究』，第39巻.

Simmel, Georg. 1902-03. "Die Grossstadt und das Geistesleben." (松本通晴訳．1965．「大都市と心的生活」．鈴木広（訳編）．『都市化の社会学』．誠信書房)

Stokes, J.P. 1983. "Predicting satisfaction with social support from social network structure." *American Journal Community Psychology*, Vol. 11.

Sussman, Marvin B. 1953. "The help pattern in the middle class family." *American Sociological Review*, Vol. 18.

Sussman, Marvin B. 1959. "The isolated nuclear family: Fact or fiction." *Social Problems*, Vol. 6.

Sussman, Marvin B. and L. Burchinal. 1962. "Kin family network: Unheralded structure in current conceptualizations of family functioning." *Marriage and Family Living*, Vol. 24.

鈴木広．1976．「都市社会構造論序説」・九州大学社会学会（編）．『現代社会学の成果と課題』.

田中宏二．1992．「ストレスとソーシャル・サポート研究の現状」．『日本労働研究雑誌』，第394号.

Tönnies, Ferdinand. 1887. *Gemeinschaft und Gesellschaft*. (杉之原寿一訳．1957．『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』上・下．岩波書店)

東京都老人総合研究所．1992．『中年からの老化予防に関する心理学的調査――第１回一斉調査（1991）――』．東京都老人総合研究所.

Tsai, Yung-mei, and Lee Sigelman. 1982. "The community question: A perspective from national survey data: The case of U.S.A." *British Journal of Sociology*, Vol. 33.

Walker, Gerald. 1977. "Social networks and territory in a commuter village, Bond Head, Ontario." *Canadian Geographer*, Vol. 21.

Webber, Melvin. 1963. "Order in diversity: Community without propinquity." in Lowdon Wingo Jr. (Ed.), *Cities and Space: The Future Use of Urban Land*. Baltimore: Johns Hopkins Press.

Wellman, Barry. 1979. The community question: The intimate networks of East Yorkers." *American Journal of Sociology*, Vol. 84.

Wellman, Barry. 1981. "Applying network analysis to the study of support." In Benjammin H Gottlieb (Ed.), *Social Networks and Social Support*. Beverly Hills: Sage Publication.

Wellman, B., P. Craven, M. Whitaker, H. Stevens, A. Shorters, S. Du Toit, and H. Bakker. 1973. "Community ties and support systems: From intimacy to support." In Larry Bourne, Ross Mackinnon, and James Simmons (Ed.), *The Form of Cities in Central Canada*. Toronto: University of Toronto Press.

Wellman, Barry and Scot Wortley. 1990. "Different strokes from different folks: Community ties and social support." *American Journal of Sociology*, Vol. 96.
Wirth, Louis. 1938. "Urbanism as a way of life." *American Journal of Sociology*, Vol. 44.
安河内恵子. 1994.「個人と集団のネットワーク」. 高橋勇悦・菊地美代志 (編著).『今日の都市社会学』. 学文社
Young, Michael, and Peter Willmott. 1957. *Family and Kinship in East London*. London: Routledge and Kegan Paul.

(平成6年7月7日受理)